

川柳企画の趣旨と審査基準



川柳テーマなど

大学時代の出会いや別れ、若き日の笑いや涙の思い出、あるいは校友会活動での思い出など『心』に残る「あなたにとっての立命館」を川柳で詠んで投稿をお願いします。

あまり立命館に拘り過ぎずサラッと思うままでも大丈夫です。
お一人様1句～2句投稿の投稿をお願いしました。

絆川柳へのご投稿ありがとうございました。

千葉県校友会、校友OB、及び関東甲信越ブロックのみなさんから
大変多くの投稿をいただきました。

投稿句数 79句

糺川柳 最優秀賞

立命館

学びし学部は
いま何處
(いづこ)



講評

大学再編やキャンパス移転の歴史を経てきた立命館だからこそ生まれた一句です。

「今何処」と問いかける語り口には、かつて学んだ学部が
移り変わったことへの驚きと、懐かしさと、わずかな寂しさが静かに滲んでいます。卒業して年月が経つほど、大学の姿は変わり、記憶の中の情景だけが鮮やかに残るもの。校友なら誰もが一度は感じる「あの頃はこうだったのに」という感情を、やわらかいユーモアを伴って表現していく。リズムも整つており、問いかけの余韻が印象的な句であります。最優秀作品にふさわしい川柳です。

糸川柳 優秀賞 二位

時代越え
親子で学んだ
立命館

九十四年 産業社会学部卒
林 正史 様

講評

この句は「立命館の歴史そのもの」を、たつた17音に封じ込めた作品です。「時代越え」で始めたことで、単なる親子エピソードに止まらず、立命館の長い歴史が一気に視界に広がります。これにより、読み手は自分の学生時代だけではなく、戦後、昭和、平成、令和へと連なる世代の連續を思い出し、それだけで胸の奥に温度が生まれます。さらに「親子で学んだ」と続くことで、母校への誇りや感謝、そして“受け継がれていくもの”が静かに立ち上がります。親から子へ、そしてまた次の世代へ。立命館の教育が人生の道しるべになってきたことが、言葉を多く使わずとも伝わってきます。校友会らしさは満点で、感情の波の立ち方自然で、読み下した時の余韻が長く続く作品です。

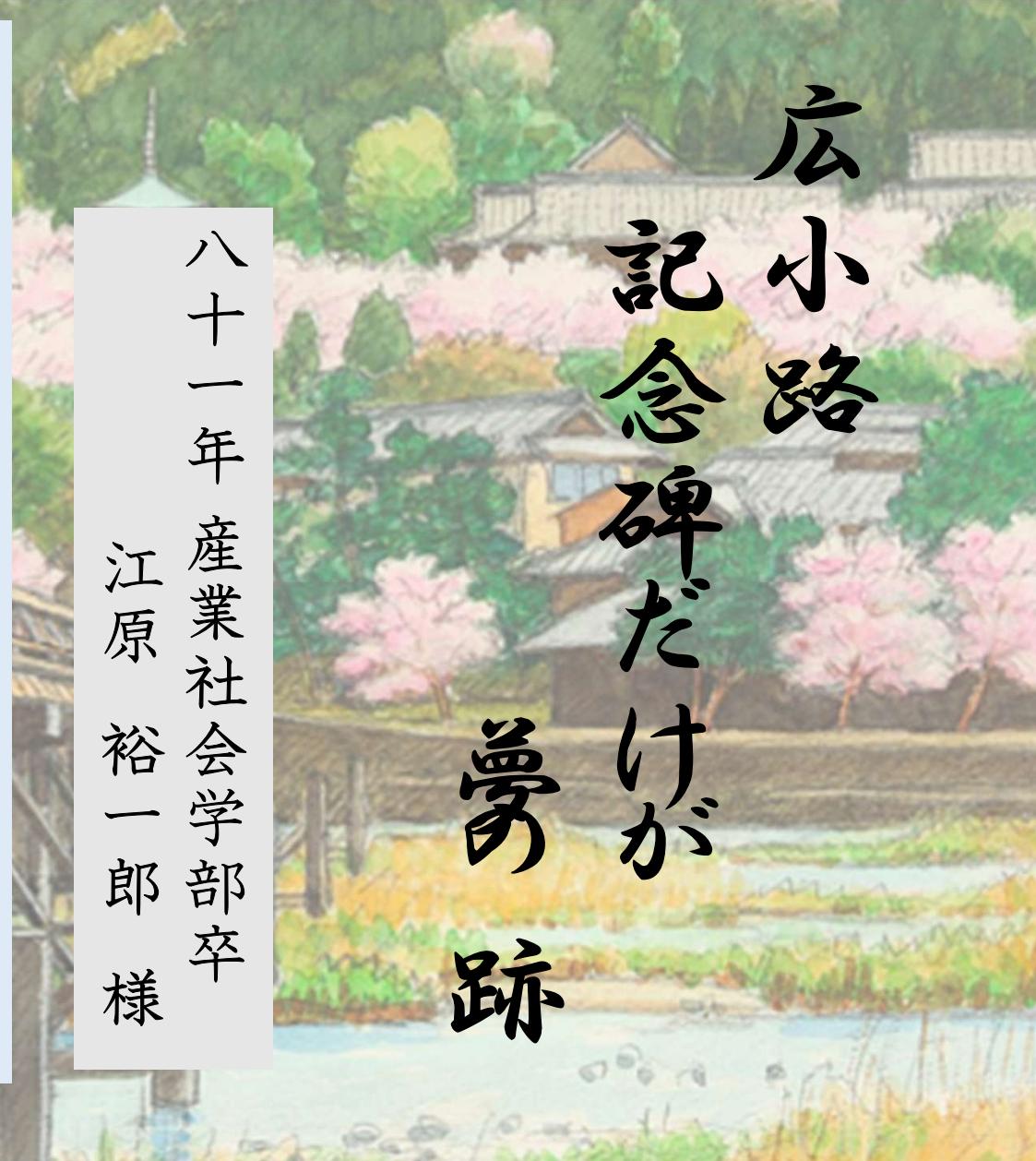
竹林の小径

糸川柳 優秀賞 三位

広小路
記念碑だけが
夢の跡

八十一年産業社会学部卒

江原 裕一郎 様



講評

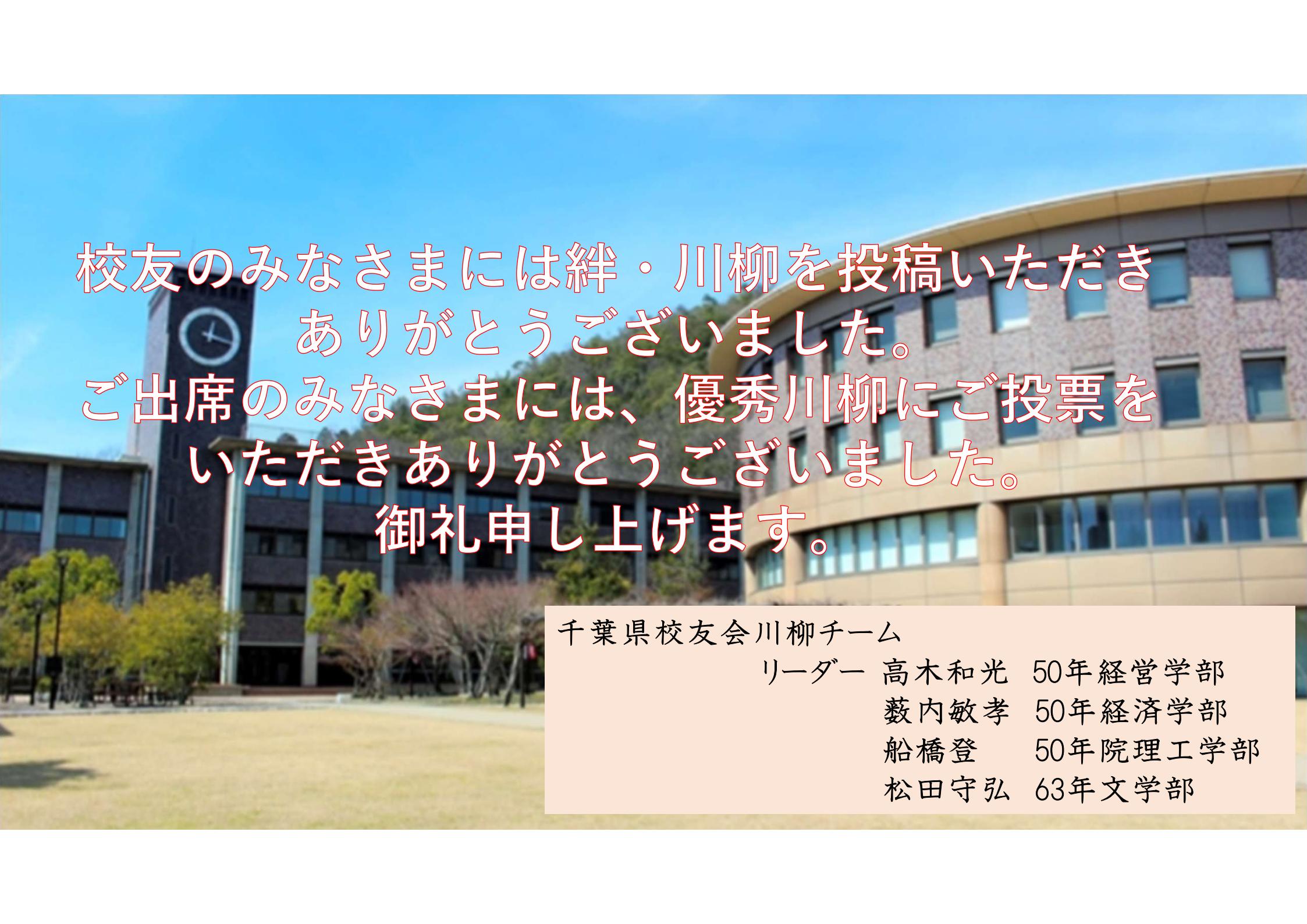
広小路キャンパスを知る世代にとつては、胸の奥にしみる一句です。かつて賑わいの中心だった場所が、今は記念碑だけになつたという事実を「夢の跡」と捉えた視点が印象的です。「夢の跡」という終わり方には、華やいだ青春が過ぎ去つた寂しさだけでなく、その時間を懐かしみ、感謝する穏やかな感情も重なつて見えます。淡い郷愁が漂い、読み終えた後に静かな余韻が残ります。校友会らしさは満点で、立命館の歴史と時間の流れを背景に持つ句として、世代間のつながりも感じさせる作品です。特定のキャンパスに思い出を持つ人が読むと、心の底で小さな鐘が鳴るような味わいがあります。

渡月橋と嵐山

特選絆川柳 4位～10位



順位	投稿川柳（代表句）	卒年 (西暦)	学部	氏名	ブロック 所属
4位	ミヤクミヤクと つながる絆 ちば40	1996	産業社会学部	寶閣 善徳 様	葛南
5位	BKC 母校は京都と 云いたいが	1971	経済学部	池田 彰 様	その他
6位	衣笠で 地図見る乙女 ガイドする	1975	理工学部	船橋 登 様	東葛
7位	はじまりは 平野神社の 桜の木	1997	産業社会学部	早乙女 恵 様	栃木
8位	衣笠と 草津の恋は もどかしい	2000	理工学部	清野 季実子 様	東葛
9位	迷えども 心のポラリス 立命館	1988	産業社会学部	井上 智之 様	東葛
10位	東葛日 第一目標 ボケ防止	1978	理工学部	徳岡 文明 様	東葛



校友のみなさまには絆・川柳を投稿いただき
ありがとうございました。

ご出席のみなさまには、優秀川柳にご投票を
いただきありがとうございました。
御礼申し上げます。

千葉県校友会川柳チーム

リーダー	高木和光	50年経営学部
	藪内敏孝	50年経済学部
	船橋登	50年院理工学部
	松田守弘	63年文学部